

第5章 学と術

学と術の区別

西先生が「術 (art)」の説明をするに際して引用した英文の出所を追って、いくつかの書物を覗いてみました。

まとめると、英文の出所は『ウェブスター英語辞典』に記載された定義であり、その定義はウィリアム・ハズリットが『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第七版に寄稿したもののからの引用でした。しかし、ハズリットの文章もまた、先行する『エンサイクロペディア・ブリタニカ』旧版からの引用であり、それ以前にも古くはネイサン・ベイリーによる辞書に記載されていたことなどが分かりました。まさに芋づるです。

結論から言うと、西先生は『ウェブスター英語辞典』から引用したと思われれます。というのも、「百學連環覺書」にこんなメモがあるのです(図①)。

少し読みづらいですが、“art Webster”と見えます。そして、“art is a system of rules.”という例の文章が記されています(『西周全集』第四巻、三三三ページ)。

また、これから読んでいく箇所さらなる英文とラテン文が現れるのですが、それらの文章もまた『ウェブスター英語辞典』に記されているのでした。

図① 「百學連環覺書」より

truth: art Webster
 art is a system of rules for
 serving to facilitate the perform-
 ance of certain actions.
 synonym
 In science, scimus ut sciamus

それなら最初からそう言うて済ませればよかったかもしれませんが、そういうわけにもいきません。私たちは、西先生の「百學連環」講義をただ読むだけでなく、この講義を通して、一九世紀末の日本に欧米の文化が流れ込んだ次第、あるいはそれが従来日本にあった漢籍を土台とした知と、どのように混ざり合ったり合わなかったりしたのかということを眺めようとしています。

実際、出典を追跡してみた結果、西先生が『ウェブスター英語辞典』を介して、ベイリーやベイコン卿、つまり、一七世紀、一六世紀にまで言葉の上でつながっている次第が見えました。英米で培われた言葉が、一冊の辞書を通じて日本に渡ってきたわけです。ところでウェブスターの英語辞典は、明治期の日本でも活躍した辞典の一つでした。その辺りのことにご興味ある向きは、早川勇氏の『ウェブスター辞書と明治の知識人』(春風社、二〇〇七)をお勧めします。

では、「百學連環」の続きを読んで参りましょう。

『ウェブスター英語辞典』から ART の定義を引き、日本語で語釈を試みせた後で、西先生はさらにこんなふうに述べます。

元來學と術とは混雜しやすきものゆゑに synonym なるものありて、文字の意味を分明に區別せざるべからず。則ち羅甸語に In science, scimus ut sciamus, in art, scimus ut producimus.

(「百學連環」第五段落第三(四文))

最後のラテン語交じりの文は、行の左側に言葉が添えて補足されています。訳してみます。

元来、「学」と「術」は混同しやすいものだ。そのため、「辞書には」同義語というものがあるのであって、文字の意味をはっきりと区別しなければならぬ。ラテン語で「学」では、知ルタメニ知り、術では、ツクルタメニ知ル」という。

「学」と「術」とでは、その動機や目的が違っているというわけです。知るために知るか、なにかをこしらえるために知るか。訳文には明示しませんが、ラテン語の *scimus*、*sciamus*、*producamus* は、いずれも一人称複数形の動詞です。

それにしても、「学」と「術」のこうした区別は、なぜラテン語で記されているのでしょうか。文章の出典とともに検討してみることによきましょう。

アートとサイエンスは紛らわしい？

西先生は、『ウェブスター英語辞典』から ART の定義を引用した後で、改めて「学問 (Science)」と「術 (Art)」の違いを明確にするためにラテン語交じりの説明を引用しました。現代語訳を添えて、改めて提示しておきましょう。

— In science, scimus ut sciamus, in art, scimus ut producamus.

「学」では、知ルタメニ知り、術では、ツクルタメニ知ル」
 「百學連環」第五段落第四文

では、この文はどこから来たのでしょうか。そう思って調べてみると、やはり『ウェブスター英語辞典』から取られていることが分かります。

ありがたいことに、『ウェブスター英語辞典』の最初の版である一八二八年版と、後の改訂版である一九一三年版の内容を電子化して閲覧に供している「NOAH WEBSTER'S 1828 AMERICAN DICTIONARY」というウェブサイトがあります。(連載当時)

ここで SCIENCE の項目を調べてみると、問題の一文が一八二三年版に書かれているのが分かります。一八二八年版では、Science の五つの定義が示された後に、ちょっと面白いことが書かれています。ここでは日本語に訳出しておきましょう。

注記——作家たちは、「アート」と「サイエンス」という語について、しかるべき区別と正確さをもって使い分けることに必ずしも注意を払ってきたわけではない。「例えば」音楽はアートであり、同様にしてサイエンスである。一般に、アートとは実践や実演にかかるとあり、サイエンスとは抽象や理論的な原理にかかるとある。つまり、音楽の理論はサイエンスであり、音楽の実演はアートである。

(『ウェブスター英語辞典』一八二八年版、SCIENCE の項への注記)